# 女面

円地文子

新潮文

# 女面（おんなめん）

新潮文庫　草 127＝5

昭和四十一年五月三十日　発行
昭和六十年三月三十日　二十七刷

著者　円地文子（えんちふみこ）
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部（〇三）二六六—五一一一
編集部（〇三）二六六—五四四〇
振替東京四—八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式会社　製本・憲専堂製本株式会社
© Fumiko Enchi 1966　Printed in Japan

新潮文庫

# 女面

円地文子著

新潮社版

1721

# 目次

第一章　霊女……七
第二章　十寸髪……八〇
第三章　深井……一四五
解説　江藤淳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 女

# 面

# 第一章　霊の女

伊吹恒夫と三瓶豊喜は京都駅の二階にある喫茶店のボックスに向きあって腰かけていた。白菊の一輪挿しの置いてある幅の狭いデコラの卓の上の灰皿に煙草の吸い殻が可成り堆くなっているところから見ると、もう大分前から話しこんでいることになる。二人の友人は数日前から関西へ来ていたのだが、偶然に先刻三瓶がこの喫茶店へ入って来て伊吹と顔を合せたのであった。

「オーッ」

「オーッ」

と奇妙に獣じみた音を咽喉からはね出して、学生時代以来続いている偶然の出合いの時の挨拶を交わすと、三瓶は一人でコーヒーを飲んでいる伊吹の前へどっかり腰を降ろした。

「何時来たの？」

伊吹はそれが癖の神経的な強い瞬きをしながら、やさしい声で言った。眼尻の下の骨が眼立って、頬が殺いだようにこけている。その頬骨を無骨に感じさせない高く細い鼻梁と、優雅に節立

った長い指を伊吹は持っていた。伊吹がその細長い指さきに煙草をはさんで、やさしい声でゆっくりものを言うと、酷薄な美女に対しているような快い圧迫を三瓶はいつも感じるのである。

「大阪に学会があって、……二日に発って来たんだよ。君は……」

「僕はS大で集中講義を頼まれて、もう一週間こっちだ。やっと昨日で終った……駅のホテルに泊っているんだよ」

「そうか……、いいところで逢ったよ。おれは夜行の切符が買ってあるんだ。ともかく京都まで出て来てみたが、どうしようかと迷っていたんだ」

「恰度よかった……」

と伊吹も言った。

「ここで、人を待っているんだよ。二時に来る筈だ。君の知ってる人だよ」

「誰れ？」

「栂尾三重子さんだ」

「へえ、栂尾さん来てるの？　京都へ」

「ああ、光悦寺の近くに川辺順良の歌碑が建ったんで、除幕式に来たんだって……」

「栂尾さんは川辺順良の弟子か……」

「そうだよ。『清流』派の歌人だもの……」

伊吹はそこで眼をそらして、煙草の灰をゆっくり落とした。

「泰子さんも一緒に来ている……」

「ああ、そう」

三瓶は気軽に、

「何処に泊ってるんだい」

ときいた。

泰子は栂尾三重子の死んだ息子の妻である。妻といっても結婚生活をしたのはほんの一年足らずで、秋生は富士山の大雪崩にあって死んだ。泰子は夫に死に別れてからも、実家には帰らずに栂尾家にとどまって、姑の三重子の主宰している短歌雑誌の編輯を手つだいながら、伊吹の助教授をしている大学に国文学の講義を聴講に来たりしている。泰子のつづけている王朝の憑霊についての研究は死んだ秋生の手をつけていたものを引きついだので、泰子は夫への愛情をそういう形で持ちつづけようとしているように伊吹達には見えるのである。

伊吹は死んだ秋生よりも二三年先輩だったし、専門も同じ王朝文学なので勿論秋生とも面識はあったが、泰子や母の三重子と懇意になったのは秋生の死後のことで、主に泰子のひきついだ物怪研究にアドバイスを与える形になったためなのである。三瓶は又別の立場から憑霊の考証に興味を持っていた。精神科の医師で同時に民俗学のジレッタントでもある三瓶は聖書以来中世に及ぶヨーロッパ諸国の鬼憑きの歴史を調べ出したのから初まって、日本でも山陰地方の狐憑き、四国の犬神、九州の蛇神などについて既に幾つかの考証を発表していたが、近頃では王朝文学にあ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

らわれる物怪、つまり死霊や生霊の第三者に憑りうつる現象に興味を持って、伊吹を通して三重子や泰子と親しくするようになったのである。月に一度、或いは二月に一度ぐらい彼らは他の数人の研究者達と一緒に栂尾家に集って、物怪について語り合う会をつづけていた。

このグループの中心は当然泰子のわけであるが、実際には泰子の背後に栂尾三重子がいて、そのことが会に古風な鷹揚さと典雅な趣きを添えていることは否めなかった。泰子はいつの時も怜悧に美しく振舞って魅力的であるが、泰子をそのように水際立って見せるためには、おっとり坐っているだけの三重子の存在が絶対に必要なことを伊吹は知っていた。ともかく泰子と三重子が京都に来ているという伊吹の知らせは、三瓶の気分を浮き立たせた。

「麸屋町の椿屋に来ているよ。今日は、栂尾さんが能の薬師寺頼方の家へ行くんだとさ。能面や能衣裳の古いものを見せるというから、僕にも一緒に見に来ないかというんだ……」

「栂尾さん、前から知っているの、その家元を」

「薬師寺の娘さんが歌の弟子らしいね。恰度秋の虫干しで蔵を開けているんだそうだ。衣裳も慶長頃のものまであるらしいよ。君も来ないか」

「そうさね。僕は、面や能衣裳には大して興味はないけど……栂尾母子には逢いたいな。ここで一休みして医学部の友達を訪ねようかと思ったんだけど、……よければ一緒に行くよ。だけど、向うにだって都合があるだろう」

「大抵大丈夫だろう。まあ、泰子さんが迎えに来るのを待っていよう。まだ三十分以上あるよ」

「君は又、何だってそんなに早くここへ来たんだ……」
伊吹はその返事をせずに、
「君と逢ったのは、いつかの霊媒の実験の時以来だったね」
と言った。
「そうそう、あれ以来だ。あれは先月の中頃だったろう」
「十七日だったよ。泰子さんが秋生さんの山で死んだ日と同じだと言ったから覚えている」
「妙だったね。尠くも手品の種は見えなかったな」
「佐伯さんなんか唸っていたじゃないか」
佐伯さんというのは応用化学の教授で同時に法華経の信者でもある人だ。科学と宗教は将来必ず握手する日があるという信念を持っているので、交霊術の実験などには特に力瘤を入れている。先月、この教授の研究室で霊媒術の実験があった。栂尾三重子は来なかったけれども、泰子も伊吹も三瓶も出席した。
霊媒は黒い交織のスーツを着た三十ぐらいの女であった。満州育ちだという話だったが身体つきのゴツゴツ骨ばった田舎くさい女だった。表情にも期待したような巫女じみた陰翳はなかった。言葉が少し緩く舌が短いような感じがした。真中の椅子にその女をかけさせて置いて、傍に立った痩せぎすな唇の薄い交霊術師が、集った二十人ばかりに幽界と現実の世界の交霊について説明した。彼の話によると、世を去った霊は始終この宇宙を浮動しているので、現にわれわれの

歩いている道にも部屋の中にも霊は常に動いているのだけれども、人間の肉眼ではそれを見ることは勿論その声をきくことも出来ない。原始時代ほどそういう霊感の能力は人間に具わっていたけれども、機械文明が進むに従って、交霊の能力は次第に稀薄になって行ってしまった。ここにいる霊媒はそういう能力を持っている数尠い選ばれた一人である。

交霊術の実験を疑われないために私は皆さんの眼の前で霊媒を今この椅子に縛りつける。そうして置いて、暗い中で、彼女の周囲に何が起るかよく見て頂きたい、……交霊術師は眼鏡の底の眼を瞬かないままで、そんな風に説明したあと、霊媒の手を縛った紐の結び目を皆に見せ、更にその上から大きい金網の枠を冠せた。部屋の電灯を消すと予め螢光塗料を塗ってあるメガホンや鉛筆、ノートなどの縁だけが暗い中に白く光って見えた。電気蓄音機が青きドナウの流れのメロディを静かに奏しはじめた。伊吹と三瓶は泰子を仲にして腰かけ、霊媒の縛りつけられている椅子の方に眼を吸われていた。伊吹には霊媒に対する好奇心と同じぐらい、くっついて腰かけている泰子のすんなりした首や右肩のこころもち下った軟かい腕の肉づきが動物的に感覚されそのことに当惑した。闇の中に何が起るかを泰子は一心に見つめているに違いない。彼女はいつもするようにそれをすぐノートに書き記して三重子に報告したいのだろうが、くらい中では所詮不可能なので一切を克明に記憶へ畳み込もうと緊張しているに違いない。伊吹は泰子の小さい頭をそっと抱きよせたい衝動にいく度も襲われた。交霊術などという奇妙に世離れた世界が馴らされた肉欲の鎖を解き放し、けしかけているようだった。

その時暗い中で拳で卓を叩くような音が聞えはじめた。
「あ！　ラップです、ラップが聞えはじめました」
と交霊術師が言った。
やがて光というには薄すぎる白い線が闇の中に半弧を描いて消え、同時に机の上のメガホンが投げ上げられたように飛んだ。
霊媒の身体は慄え出したらしく、椅子の足の床に触れる音がかたかた小刻みに聞える。コツコツ拳で床をうつような音がしてその度に白い線が走り、風が暴れているように机の上のノートが落ちたり、鉛筆が飛んだりした。呻きのような祈りのような曖昧な音が霊媒の唇から洩れはじめた。
交霊術師がレコードをとめて立上った。
「霊が憑りました。訊ねて見ましょう。……もし、もし、あなたはどなたですか」
その時突然スイッチを入れたように低い男の声が霊媒の口から洩れた。
「Je suis descendu de la montagne Je mèn vaisà la montagne（私は山から来た、私は山に消えた……）」
「あ、何ですか、何処の言葉ですか」
と交霊術師が言った。
「フランス語ですね」

と会員の一人の学生が答えた。
「山から来た、私は山に消えたと言いました」
「きいて下さい！　きっとフランス人の霊でしょう。登山家かも知れませんね」
「山から来た……山に消えた……」
泰子が吐息のように響きのない声で言って、そっと伊吹の膝の上の手を探った。伊吹も泰子の小さい手をたしかめるように両手の間にはさんだ。そんなことを泰子が自分から進んでするのを不思議だとも思わないほど、霊媒の口にする乾いた男の声にひき入れられていた。
フランス語の達者な学生は闇の中で霊媒と問答をはじめた。マッターホーンに登山する途中クレバスに落ちこんで死んだ登山家らしい、と言った。「ここはどこだか解りますか」と訊くと、「知らない。うすぐらい、埃で乾いた土地だ」と霊媒は答えた。「あなたはいつ死んだのですか？」
「一九一二年だ」
「それからどれだけ月日が経ったかわかりますか」
「解らない、氷と雪とうすぐらい、強い風の吹く場所を歩いている……五千米以上の高地と似ている……」
「あなたには妻や子はあったか」
「妻はあった……子供は覚えない」
「ないのですか」

「そうだったのだろう」
「さっき拳で床を叩くような音がして、ノートが落ちたり、メガホンが飛んだりしましたね。あれはあなたが動かしたのですか」
「動かしたのではない……しかし、歩いてゆく道で邪魔だったから自然に弾ねとんだのだ……」
「あなたの名前は……」
「ジャン・マトア」
「死んだ年齢は」
「うるさくきくな！　忘れた……」
最後の言葉を霊媒は怒った声で言った。
「霊はかえりました、気を悪くしたのです」
と交霊術師が言って、スイッチを捻った。金網の枠の中で霊媒は椅子にぐるぐる巻きに縛られたまま顔を仰向け、拷問にあったあとのようにぐったりしていた。眼を一の字に閉じて咽喉を魚のようにひくひくさせていたが、まだ感電しているように手足が細かく慄えていた。部屋の中は大風に吹きさらされたように乱雑になっていた。空いた椅子が二つ足を上に見せてひっくりかえっているし、隅の方にあった背の高い花台も椅子の上に倒れかかっていた。メガホンやノートや鉛筆ばかりでなく、メモのザラ紙が床に無数に飛び散っていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com